探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：大崎上島中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
大崎上島中学校	5	106
大崎小学校	8	122
木江小学校	5	32
東野小学校	6	47

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

大崎上島中学校区では幼小中連携プロジェクト「大崎上島学」を展開している。園児児童生徒の発達段階に応じて系統立てた学習を計画的に行い，生活科や総合的な学習の時間もその一役を担っている。しかし，「大崎上島学」の指導方法の蓄積はこれまでの努力の成果であるものの，学習内容が各学年で形骸化しているところがある。また，児童生徒は，意欲的に学習に臨むことはできているが，探究課題において，主体的に進んで活動を進めることやさらに学びを深めることには課題がある。「学びの変革」パイロット校事業で検証として用いる学習に関する意識調査を大崎上島中学校の生徒に５月に行ったところ，『総合的な学習の時間では，自分で課題を立てて情報を集め整理して，調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいます。』に否定的に回答している生徒の割合が２０％となっている。

２　研究の概要

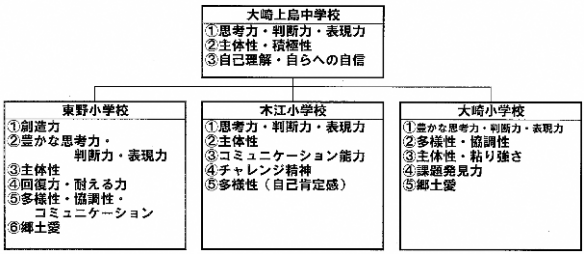
（1）研究テーマ及び研究のねらい

大崎上島中学校区では研究テーマを『大崎上島を担う　たくましく行きぬく子供の育成～「大崎上島学」のさらなる充実を通して～』と設定している。「大崎上島学」を，ＰＢＬの考え方をもとにさらに発展・深化させていくことが研究のねらいである。「大崎上島学」のさらなる充実によって，将来の大崎上島を担う児童生徒の資質・能力を向上させることが大きな目標である。

（2）資質・能力の設定について

大崎上島中学校区の各学校で育成を目指す資質・能力がどのように設定されているかを系統図として，次のようにまとめた。大崎上島中学校区では，各地域の実態に応じて育成を目指す資質・能力を設定している。

大崎上島中学校区　育てたい資質・能力　系統図
（R04.01.14）



特に，大崎上島中学校では，「広島県の１５歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力」や各小学校での資質・能力を踏まえたものになっている。

（3）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

「大崎上島学」のこれまでの取組の蓄積があるのは大きな強みである。改めて，「大崎上島学」とは，単に自分のふるさとを知るだけでなく，島の自然，伝統・文化，産業や暮らしを児童生徒が探究することで，自らを見つめ直し，自分の生き方を考えることにつなげようとする学習のことである。地域のすばらしさに気づかせ，地域に誇りに思う心や，地域の発展に貢献する態度を育てることをこれまでも目標にしている。そこで，ＰＢＬの考え方を踏まえ，さらに充実した学びとなるように各校で研究・実践に取り組んだ。取組の１つに「探究学習シート」の開発・実践がある。これは生徒が自ら企画・立案・実行・反省できるように仕組むためのワークシートである。「探究学習シート」により，児童生徒が９年間で企画・立案・実行・振り返りという探究的な学びのサイクルを深化していく姿が期待できる。今年度は大崎上島中学校でこのシートを試行した。

【小中連携の取組】

年度当初に予定をしていた児童生徒の交流の場である「櫂伝馬（伝統行事）体験」や「クリーン大作戦」は新型コロナウイルス感染拡大防止のため，中止となった。しかし，小学校３校の合同授業であるＫ授業に推進リーダーが参加し，小中連携の基盤を作ることができた。

【K授業について】

小学校３校では，「大崎上島学」において，「K授業」として，各校各学年の総合的な学習の時間や生活科の取組を交流する場を設定している。第1学年では「つくって あそぶ」，第4学年では「大崎上島の海」，というように，共通のテーマを設定し，探究活動を行い，発表会を行っている。発表会にはお世話になった地域の方も招いている。それが児童の意欲にもつながっている。

【資質・能力の評価】

大崎上島中学校では，育成したい資質・能力の内容を次のように定義し，その力が自分に身に付いているか意識調査を５月と２月に行っている。５月には，なぜこれらの力を身に付けることが必要なのか，資質・能力や，学び方についての生徒向けオリエンテーションも行っている。

【スキル】	
思考力・判断力	自ら課題を見つけ，論理的に思考すること（把握，分析，比較，推測など）を通して，課題を解決することができる力
表現力	目的や意図に応じて，自分の考えや意見をまとめ，相手に分かりやすく伝えることができる力
【意欲・態度】	
主体性・積極性	指示を待つのではなく，自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力
【価値観・論理観】	
自己理解・自らへの自信	自分の長所や短所を理解し，自己の生き方を考える力

また，開発・実践した「探究学習シート」では毎時の取組の自己評価を書きやすくする工夫をしている。それによって指導者は児童生徒の変容をとらえやすくなった。

各小学校においても，「大崎上島学」を進めていくにあたって，意識調査や振り返りの蓄積，それを踏まえた今後の学習指導の検討を行っている。各小学校の同じ学年を担当する教員同士が集まり，進捗状況を確認しながら，単元設計を行

っている。児童の資質・能力の変容を，指導を担当した教員の所感から見取る工夫も行った。

３　実践事例

【東野小学校第５学年での実践事例】

小学校第５学年の「大崎上島学」の目標は「私たちの町の産業の現状について現場の見学や取材を通して，その工夫や努力を知る。また，自分たちの生活と重ね合わせ，今自分ができることを考えて行動したり，将来何が必要かを考えて提案したりすることができる。」である。「大崎上島の産業」をテーマに，東野小学校は水産業，木江小学校は観光業，大崎小学校は農業と各校で分担し，探究活動を進めた。地域の商店や施設を訪問したり，各業種の展望を調べたり，考えたりした。K授業当日は，各校で調べたことを劇にして発表したり，動画を作成して発表したりした。内容だけでなく，発表方法にも驚きや新たな学びがあった。他校の同学年に対しての相手意識の芽生えや，大崎上島の未来を担う子どもとしての成長を期待しているK授業としての成果があった。

また，より探究的な学びとなるように，東野小学校第５学年では成果を持ち寄ったK授業から課題の再設定を行い，島内に住んでいる方から，Ｉターンされて島に来られた方に視点を変え，島の魅力について再発見・再確認を行った。これまでの学習の中で，Ｉターンをされ，産業を営んでいる方々に興味を持つ児童がいたことや，島外の方が感じている大崎上島の魅力と自分たちが感じている魅力について比較することで新たな発見があるだろうという期待から，単元を計画し実践した。情報の整理・分析を行う時間は大崎上島町「探究的な学習の在り方」研究推進協議会の提案授業として実施した。

【大崎上島中学校第１学年での実践事例】

中学校第１学年の「大崎上島学」の目標は，「地域のよさを見つめ直し，大崎上島の豊かな歴史や自然環境，人とのつながりを受け継ぐためにはどうすれば良いかを考えることができる。」である。この目標を達成するために，島の文化施設や自然を体験する校外学習や櫂伝馬体験，福祉体験学習を例年行っている。今年度は，福祉体験学習の内容を見直し，探究的な学びになるように単元開発を行った。例年の福祉体験学習では，高齢者福祉施設を訪問するにあたって，どのように高齢者の方と接すればよいか，また，生活を楽しんでもらうためにできることはないかという課題を持ち，学習に取り組んできた。今年度は福祉体験学習の“事後”の学習が充実する単元構成を行った。特に少子高齢化が進むことで，伝統文化だけではなく，産業や自然環境にも影響が出てくることや，高齢者の方を含め，みんなが幸せに生活をしていくためには何が大切なのかを考える必要性を感じることを福祉体験学習の目的とした。そして，そこで感じた課題意識をもとに，クラスでプロジェクトチームを結成し，各チームによる探究活動を設計した。そうすることで，ＰＢＬの特徴でもある，「実社会・実生活の課題を解決（社会への還元）する学習」になるようにした。また。具体的に他に工夫したのは次の点である。

①プロジェクトチームを結成する際には事前アンケートから，各自の興味や疑問を抱いていることを調査し，その関心が同じ，もしくは似ている生徒たちをチームとした。

②探究テーマを「福祉」や「少子高齢化」などと限定せず，島で進む少子高齢化の視点を踏まえていればよいこととし，各チームのアイディアで自由に探究できることにした。

③評価に関わって，育成したい資質・能力から，生徒にもわかりやすい形で評価の３項目提示した。それについて毎時間自己評価ができるようにした。

④開発した探究学習シートを用い，生徒が計画・実行・振り返りといった探究の過程をしやすいように工夫した。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

大崎上島中学校での資質能力に関して，５月と２月の意識調査の比較は次のようになった。

思考力・判断力	＋３％
表現力	＋１０％
主体性・積極性	＋５％
自己理解・自らへの自信	＋１２％

全項目で肯定的評価の割合が向上しており，取組について成果があったといえる。また，第１学年の実践事例における事後の自己評価においても，学習を通して自己の成長を実感している記述があり，「大崎上島学」を通して育てたい姿を見ることができた。

東野小学校の実践事例では，Ｉターンという社会への還元や深い学びにつながるテーマを設定したことで，児童の主体的で探究的な学びへとつながった。児童の振り返りからは，「大崎上島について新しい事を知れることが楽しい。」「インタビューを通して，自分たちの考えと違う考えを知ることができる。」といった記述があり，もっと学びを深めたいという児童が増えた。他の各小学校からも「大崎上島学」やK授業の取組から，児童が各学年のテーマに沿った探究活動を進めた成果があった。

また，協議会や研修会を通して，これまで取り組んできた「大崎上島学」をＰＢＬの考え方を踏まえ見つめなおし，充実させるためのポイントを見付けることができたことが大きな成果である。

（２）課題

東野小学校の実践事例からは，探究的な学習において，教師も児童も同じゴールイメージを持つことが必要だという指導上の課題が挙げられた。社会への還元につながるテーマ設定だけでなく，本時の学習がゴールにどのようにつながっているのか，また，目的を実現させるために，何が必要なのか，何が足りないのかといったプロジェクトの進捗状況を，教師と児童生徒が俯瞰して見ることが探究的な学びには必要だとわかった。また，大崎上島中学校の事例からは，探究がうまく深まっていかないチームがあったことから，知識や経験の有無が探究の深さに影響するということも明らかになった。

また，「１．指導上の課題」でも述べた総合的な学習の時間に関するアンケートを２月に行ったところ，否定的に回答している生徒がさらに５％増えた。探究的な学習過程を踏むことを意図して教師は指導しているが，それを生徒が意識化できていないことが要因として考えられる。

（３）今後の改善方策等

探究的な学びを実現するためには，社会につながる魅力的なテーマの設定やゴールイメージの共有が必要であることがわかった。また，それには知識や経験の有無も大きく影響することもわかった。「大崎上島学」の単元構成をそれらの視点から見直していくことが必要となる。さらに，それを児童生徒の資質・能力の向上につなげるためには，それらの探究過程の意識化，つまり，学習過程を効果的に振り返らせ，探究過程のよさを実感させることも重要になる。また，成果を共有するための中学校区で共通する意識調査なども研究していく必要性も出てきた。他地域の実践などを踏まえながら，研究を深めていきたい。